



# 夜明けへと急ぐ夜



pinokopapa

## 夜明けへと急ぐ夜

---

体は綿のようになっていた。車を予約しているいつものホテルの玄関に止めた。仕事に疲れ、家にも仮住まいのマンションにも帰りたくないとき、由依はこのホテルに泊まる。車のエンジンを止めると、ドアボーイが車のドアを開けた。由依はキーを、折りたたんだ紙幣と一緒にそっと彼に渡す。

「お願いします」

「いらっしゃいませ。有難うございます、秋吉様。」

と声ができる。離婚してから姓は元に戻したが、それを伝えるのも面倒なので、ここでは旧姓のままにしておいてあるのだが、常連なので支障はなかった。フロントへ行くと

「いらっしゃいませ、秋吉様。お部屋はいつもの通りにご用意いたしております」と、宿泊カードに記入している間にキーが渡された。

「これって面倒くさいわね。ICカードか何か渡せば、宿泊カードなんか書かなくてもいいようにできそうなのに。」

と文句を言ってみる。

「申し訳ございません。決まりなものでございますから」

宿泊カードを受け取りながらフロント係が言う。一応ルームナンバーを確かめて、

「ありがとう、お世話になります。」

とエレベーターへ向かった。案内のボーイはついて来ない。いつも断っているからだ。荷物もないから運んでもらう必要もない。しかし一応ブライダルショップには立ち寄る。ブランド物の女性下着がここには売っている。何も用意してない由衣は、ここで真新しい下着を買う。時にはその横のブティックで、間に合わせのスーツも買ったことがあった。ホテルは泊まるだけではない。

。

買い物を済ませ、エレベーターの乗る。降りる階を指定するボタンの下のカード差込口にカードを差す。すると通常は止まらない階のボタンが指定できるようになる。十二階を押した。たまたま同乗者がいたのだが、その視線から奇妙な反感を感じる。それを後目に、開いたドアからさっさと降りる。

「いらっしゃいませ、秋吉様」

とスーツ姿の女性ルーム係が、下から私が到着するまで、いつも待っていてくれる。

「ありがとう」

そうやってルームキーを渡すと、彼女が鍵を開け、ドアを押し開いて、私をいざなう。私が中に入ると、

「おやすみなさいませ。」

と、ドアを閉めて行った。明日の朝の朝食と新聞のリクエストは、もういつも通りとわかっているので改めては訊いてこない。その気楽さが、このホテルへ来る私の理由だった。ベッドに買い物した品を投げる。床からの背の高いスタンドが柔らかな照明になっている。もうわたしは無遠慮に上着を脱ぎ、靴を投げ捨てる。分厚いカーテンは外に明かりさえ漏らさないのだから、わた

しはそのままバスルームへ向かう。あたたかく暖房された廊下を歩き、大きなガラスの扉を押し開いて、全部脱いで浴室に入る。湯はもう十分な量が張られていて、すぐに入れる。大きなバスタブに手足を伸ばし、ボタンをおすと気泡が噴き出す。少しのぼせそうだが、肩の張りや腰の辛さが一時に溶けてゆくようだ。目をつぶり、明日の事を思う。チームに報告することがたくさんあった。外資の依頼でM&Aを仕掛ける今回の企業は、問題が多すぎた。株価の時価総額も、表向きの評価はそれ相当ではあったが、内実を調べるとキナ臭いものが散見された。その下調べをするのが私の仕事だった。法科大学院を出て弁護士になってもイソ弁にもなれず、国選さえ順番待ちということだが、由衣たちのチームは弁護士資格を法廷ではなく、M&Aとか企業紛争、著作権、特許訴訟に特化して活動することによって寝る暇もないほど働かされていた。

M&A、企業買収というと、ハゲタカファンドが獲物を狙ってなんておどろおどろしき聞こえるが、そんな敵対的買収ばかりがM&Aではない。結局は高齢化、少子化、景気の後退等様々な問題が今の中小企業を取り巻いて、後継者がいない、経理内容が改善しない、帳簿上は黒字なのに現金がない、職種が時代遅れになった、採算がとれる見込みが立たないなどの諸事情で会社を手放そうとしている経営者と、それらを買収し、もしくは出資しようという人たちを結び付ける仕事だ。とはいえ、不採算が見込まれる企業の買収だから信用調査が大変だった。帳簿上は黒字でも、実状は解らない。会社と銀行だけを調査しただけでは決して十分ではない。だから、我々が声をかける前に、隠密に調査する。それは買取側、出資側も同様だ。一度\*\*データバンクの資料だけで信用して大失敗を招きそうになったことがあった。金を出すほうだから金さえあれば大丈夫とはいかない。特にアジア系の出資者は怖い。輸出してはいけないものを輸出することを目論む輩もいるのだ。こんなものが禁輸商品になっているとは思わないものまで、禁輸と指定されていることもあった。たとえば、プレイステーションなんて単なるゲーム機だと思うのだが、このなかには128ビットの最速CPUが組み込まれていて、これを何台も使うとスーパーコンピューターが出来てしまう。だからこれは共産圏には輸出できない品目に指定されていた時期があった。おもちゃが軍事目的に転用できるとは思いもつかなかいが、世界はこうした情報であふれている。それゆえにこそ、由衣たちの出番もある。

チームには元銀行マン、私立探偵、中小企業診断士、弁理士そして弁護士が入り乱れて加わっていた。といっても、どちらかというと、おてんとさまの下を顔を上げて立ち回れる仕事じゃないから、後ろめたさもあった。さらに、そのチームの中で一番使い物にならないのが、弁護士だった。もちろん、法廷となれば弁護士がいなければ話にならない。だからお飾りにでも弁護士は必要だった。しかし帳簿の裏も読み取れない、銀行の金の流れも解らない。特許内容は弁理士の範囲だ。じゃ弁護士は、となるとチームのリーダーとしてそれらを統括し、法律的に適法か

否かを判断し、たとえば表向き綺麗な話に聞こえるが、時として法律を使って恫喝をかけることも弁護士の仕事だった。言わば、総会屋が弁護士のバッチを付けているといったことも、やらなければならないということだ。

円満な企業買収として成功したと言える事例も多々あるが、依頼を受けて調査にかかり、内心びっくりすることがあった。ヒゲゼンマイときいても最初は何に使われているのか、想像もできなかったのだが、かつて日本はスイスを抜いて機械式腕時計で世界を席卷した。その正確さは、1カ月で1秒の狂いに抑えるところまで行ったし、日にちを表示し、月の表示も加え、曜日もわかるようにしたのも日本だった。そしてそこまで技術を磨きながら、自分でクォーツを作り出し、機械式を駆逐してしまった。腕時計は実用品に成り果てた。それでもまだ日本の腕時計製造会社は進化し続けてはいるが、機械式腕時計の部品を作っている下請け会社が生き残っていた。\*\*発条という会社だった。ここは大手の下請けとしてヒゲゼンマイと自動巻の部品を作り続けていた。さらに今も高級腕時計を工芸品として、ほとんど手作りのようにして作っているスイスの有名ブランドの少数単品の発注に応じて生き残ってきた。だからローレックスとかオメガとかの、高級ブランドではあるが大量生産しているところではなく、一個数百万とか1千万を超える手作りの単品生産と言っていい腕時計の部品として発注される、数個から数十個の部品を作っているのだ。それゆえ部品の単価も高いが、納期もきちっと守ってきた。さらに製品の納品前品質検査も厳重だった。それがこの会社を生き残らせてきたと言えるが、あまりにも特殊だ。それゆえ技術者が高齢化し、後継者もいなかった。では買収側はなんのメリットがあったのか。それは特許だった。それも検査技術と検査機械の特許だ。その価値などこちらには解らないが、検査方法とその精度を上げるための技術は、表にこそ出ないが、会社を支える大切なものだ。部品を作る技術は大手にもある。だができてきた部品の品質を確かな一定のものにするのは検査だからだ。そこで後継者がいないとなると、それまで部品を納入していた会社を買収に乗り出してきた。特許があると買わなければならない。だが買収評価額が問題だった。

買収側の会社は、膨大な特許料を言われると警戒し、我々コンサルタントと一緒に\*\*発条に乗り込んだ。さすが精密部品を作る会社だけあって、建物自体は古びていたが、中は清潔に整えられていた。もちろんコンピューター関連の部品を作るクリーンルームのようなことではなかったが、整理整頓されているとかのレベルではなく、清潔のレベルまで行っていた。

そこに働く人たちは一様に制服を着ている。男も女も同じ制服だ。そして皆年取っていた。工場の隅で作業をしていた老人が立って私たちを迎えてくれた。会長だった。彼が別室の案内して、また出て行った。今度は少し若い男性を連れてきた。品質検査の\*\*だと紹介した。彼が実質全製品の品質管理をしているといった。検査技術の特許も彼が考案した。その男は会長の息子だった。

しかし、なぜ会社買収に応じることにしたのですか。

由衣が訊くと、

もう、この時間がないのですわ。

と会長が息子を指差し、言った。それ以上は言わなかったが、由衣にはわかった。

ですから、買収金額はほどほどでいいんです。これの嫁さんや子供が先で困らないほどでいいんです。しかし、売るからには責任を持ちたい。それで、条件があります。私はこれの作った技術を残したい。だから、買収側から優秀な人材を派遣してもらいたい。できる限り長く教えたいとおもっとるんです。

それを通訳すると、買収側の責任者である副社長が、目を見張った。何を言ってるのか理解できないという風だった。買収はビジネスだからだ。

結局その会社の買収は\*\*発条の出した条件通りで妥結した。社長、会長は技術伝達が済み次第退任する、従業員はそのまま解雇しない。そして買収金額はそちらの予算内で、といった内容だった。買収側の人間は、いくら友好的買収だと言っても、こうも容易くいくとは、日本人は何を考えているんだと詰め寄った。自分の技術を残す、そのためには自分の持っているものを何の見返りも求めず、惜しみなく教える、それが日本人気質だと説明した。それが解らない。外人には到底理解できないことだった。日本人はビジネスだけのために仕事をしてはいない。特に職人はそうだ。それゆえ、わざを伝えることにはこだわりがあり、ときには敵にまですべてを教えてしまうこともある。しかし近代的な意味での技術となると、近年、日本でも権利意識が根付き、特許という言葉が、金を生むという常識が出来た。そう話すと、ますます解らないといった顔つきになった。

しかし、今回の買収は敵対的であるから、調査も綿密に行わなければならなかった。それも、隠密にだ。それゆえ代理人としての私たちの事務所が使われた。相手方の企業は一時期音響の業界では一二を争うトップメーカーだった。しかしオーディオがすたれ、映像の時代になると時流に乗れず、ライバル社は台湾に身売りし、そのあと消えていった。当の会社は真空管からトランジスタに乗り換え、それも高級アンプへ向かい、ブランドを確立する方向を選んだ。中でも、オーディオパーツの中で手探りでしか作れないスピーカーの部門で、録音スタジオのマスタースピーカの地位を獲得するまでになった。つまり世界標準ということだ。といってもそれがいい音だというわけではない。どの音域もひずまず、フラットに表現されるということである。能率も高いので、どんなオーディオセットでも普通に鳴る音源が作れるということでもある。

だが米国の買収会社が目を付けたのは、そんなことではなかった。もう忘れられた技術としての真空管アンプの最重要部品である出力トランスのなかにそれはあった。トランスの中の誘導コイルを巻いている鉄芯は、繰り返される誘導コイルの磁化で磁性を帯びてしまうが、この会社の芯材はたとえ磁性を帯びても、鉄の結晶体が通常の場合のように、単一方向には並ばず、全く思い思いの方向に向き、磁性がランダムになって、結局磁石化してないのと同じことになるという特殊無磁性化鉄であった。この鉄材の製法が日本で3番目の製鉄会社とこの会社で開発された特許で、これはアメリカ、欧州、その他で認められていた。オーディオ会社としては、今の時代になって、それがどんな価値をもっているかなんて、考えもしなかつただろう。だが、米国企業は見逃さなかつた。というより、その米国企業の後ろにいる、日本の原発を作っているT社が見逃さなかつた。この会社は日本でも控えめで、けっして派手なCMも打たないが、家電の仮面をかぶって日本企業が撤退するパソコンも自社で作り続け、その仮面の下で大手重電気工業としてミサイルから原発まで作っていた。なかでも独自技術の原発は、世界で一番安全といわれ、韓国が落札した某国の原発の、真の製作者はこの会社だった。いや、それが解っていたから、某国も韓国に落札させたのだ。そしてこのT社は米国のGEの原発部門も買い取っていた。さらに、日本のもう一つのH社も、違う米国原発会社を買っている。それゆえ、米国には自国の原発会社はもうない。あのスリーマイル島以来、原発は米国の重荷になってしまい、属国たる日本の企業に引き受け

させたんだと由依の会社のものが言っていた。世界で最先端の原発を作っているのは実質フランスと日本のみで、中国、ロシアは一周遅れの、よれよれのランナーだ。ましてや韓国の原発は自国製の原発は一基も作れていない。今ある原発も、いつとまるか、いつ事故を起こすか解らない代物で、福島の大惨状がいつ起こっても不思議はないのが現状だ。それでも韓国は原発を動かし続けねばならない。そうしなければ、首都ソウルさえ頻繁に大停電を起こしているほど、電力が間に合っていない。まるで北朝鮮の話かと思うが、これが現実で、政府は財閥系の工場に優先的に電気を回し、一般は停電慣れして気にも留めない。さらに、韓国テレビのニュースでは、ソウル市内の舗装された道路で、3マイクロシーベルトの放射線量を観測したと報じている。これは東京の平均の1000倍以上でチェルノブイリより数等高い値であるし、福島の平均値を大きく上回っている。なぜか？韓国で廃炉にした原子炉の建屋その他のコンクリートをソウル市内の道路の骨材にして敷き詰めたからだ。それゆえか、韓国の甲状腺がんの発生率も恐ろしいほど高く、全がん発生人口の23パーセントをこえている。これは国際的にも類を見ないほど高く、チェルノブイリをも上回る。しかしこれに対して蓬萊大学の教授が、もう甲状腺がんの検診を受けるのをやめようと言いだした。甲状腺がんは症状が出てから治療しても90パーセントは完治するからというのだ。国家の財政を圧迫するから、そんな検査をするなどは学問の徒のいうことか、と思う。由依は、あの国は放射能で心まで汚されているとおもう。

そして、こんどの買収劇はT社の技術のためだった。まさに原発の次の物理の火、核融合炉のためのトライダル超伝導コイルとその収容器4個、470億円をEUから請け負ったからだ。しかし、日本の核融合炉の技術はそれだけではない。この核融合炉の計画と研究のための立地場所こそフランスに譲ったが、トカマク型の実験炉で世界最長のプラズマ発生時間を達成したのは日本であり、もう少し低圧でプラズマ発生を達成したのも九州大学だ。その意味で。日本は最先端を行っていると言える。この分野での米国は、日本やEUとは違った形の実験炉を模索していたが、思い通りの結果を出せず、結局国際機構に加わってきている。

そんな中、日本は国内で独自の動きをしていて、2013年からJAEAが実験炉を建設中で、2019年から実用化の方針だ。由依はそんな話を聞かされて、鳥肌が立った。一般の人が何の関心も持たないでいるうちに、1億5000万度のプラズマなる物理の火がともし、それを磁場で空中に固定、維持してエネルギー、すなわち電気に変える、そんなことがいまどこかで行われようとしている。あの原発事故によってどれほどの事が起こったのかと思うと身震いしてしまうのに、いままた全く新しいテクノロジーが人類の前に現れたのだ。原発は人類史上最も汚いごみを残した。このごみの処理は先の科学の発達にまかせて見切り発車し、美味しいとこ取りだけして、後は野となれ山となれが現状だ。核融合炉も、何が起こるか分からない。もしビッグバンが神の手によるものなら、極最微粒子を融合して水素を作り、ヘリウムを作って星々を作った手が太陽を作った。今我々は地上に神の手をもって、太陽を作ろうとしている。それが何を生み、何をもたらすか、解らないままに未知の領域に進んでいる。人々の前に描かれるのは輝かしい未来だ。夢のエネルギーとあの時も言われた。無限のエネルギーを手に入れたと聞かされた。それなのに米国では電力発電の45%が石炭で作られている。原発は20%に過ぎない。この現状はなにを物語っているのか。原発は夢のエネルギーではなかったのか。無尽蔵のエネルギーならそこから

汲み続ければいいじゃないか、米国は何かを隠していると、聞かされた。だからGEをはじめ、原発製造会社を日本に押し付け、自らの手は綺麗にしたのだ。



なにかとんでもないことに首を突っ込んだと思った。由依の文系の頭では到底理解できない内容だ。炉の中に小さな太陽が出現するさまを思い浮かべるが、青い空に輝いている太陽しか見えてこない。眼を焼く光の熱球だ。由依はベッドの上で寝かかっていた。しかし、あの粘りつくような眼の光が、自分の体をなめつけてくる気持ち悪さを必死に耐えて、早口に抗弁した。だが、この人たちは誰、と思った。そのイントネーションと早口ながら聞き取れる言葉から、中国人、と直感した。なんでこの会社に中国人がいるの、とも思った。

総会屋か、情報屋か。なに！、嗅ぎまわってる？

奇妙な発音の日本語と、暗い残忍さで鈍く濡れている目がやみのようだった。逃げないと殺される、闇に葬られると感じた。しかし、なにをこの人たちは知りたいのか、逆になにを隠しているのか、由依は部屋の出口の様子を見ながらも、考えていた。しかしそれは由依が調査に来た対象とはかけ離れていると思った。

気を付けたほうがいいかもしれませんよ、何か軍事技術に応用できるGPSを使った位置情報システムと、3次元位置情報確定システムを結び付けて、あの自国の人工衛星を撃ち落してみせた技術は、こんどの音響メーカーの開発したものらしいですよ。

えっ、日本のあんなちっぽけな会社に、そんな技術があるの？

いや、カーナビを作ったのもこの会社ですし、その延長でGPSの応用技術を開発している間に、平面から立体の三次元的位置確定が必要になって頑張ってたらしいんですよ。それを某国の軍事スパイが目を付けて、高度に精密化させ、レーダーシステムと連動させることに成功したらしいんです。

なんか、おもちゃから武器ができたって感じね。

そうです。T芝がパトリオットの防空システムの心臓部である三次元位置確定システムを開発していますから、同じようなことをたまたまやってるわけですが、等速運動をしている衛星と加減速しているミサイルとははるかに難易度が違いますから、某国の技術の方はあまり気にするほどの事ではありません。しかし軍事スパイがすでに入り込んでるみたいですから、危ないですよ。こんなふうに聞いてはいたのだ。だが公然と役員を名乗り、面会に応じてくるとは思ってもみなかった。由依は脱出を図るため、自分が弁護士であることを名乗ることにした。そして、個人がクレームによる賠償を求めているということにして、その依頼で来たのだと告げた。すると、まだ疑わしいといった目つきで由依を見ていたが、秘書さんがなにか勘違いをされたんじゃないですか、と弁護士の名刺を見せると、ぷいっと男は出て行った。由依は一息おいてそっとドアを開け、すべるようにろうかにでてエレベーターに乗り、一階のロビーに降りた。ガラス張りのフ

ロアの明るさに、助かったと思った。先ほど顔を合わせた受付嬢が由依を見ていた。由依はそれも無視して外に出た。あとは地下鉄を三度乗り換えた。それも、閉まる寸前のドアからすり抜けてホームに乗り、自分が最後に降りたことを確認し、別な路線の地下鉄に乗り換えて、不審な尾行がないことを確認した。考えすぎかもしれないが、あの男のねめつける目の光はそこまで由依を怯えさせた。都会の群集の中では、何が起こるか解らない。アイスピックで腹を刺されて、刺された本人が気付かず想到距離があるき、少量の出血に周りが気が付いて声をかけ、途端に気を失って倒れたなんて、仕事人のような事件もあった。由依はレンタカー店で車を借り、もう一度尾行者のいないことを確かめて、自分の車の置いてある駐車場に乗り込んだ。そして、レンタカー店に車を置いた駐車場の住所を告げ、自分の車に乗り換え、このホテルに予約を入れてやってきたのだ。その間に、所長には連絡は入れておいた。

そうですか。それじゃ、私たちの事前の調査が不十分だったのですね。そんな現状は思いもありませんでした。知財部門のユ一君の情報が的を射てたわけです。これは、よほど注意してかからないと。

と所長は電話口でいった。

翌朝、由依はフロントで支払を済ませると、そのまま出口に向かった。

おはようございます。秋吉様。

とドアボーイが声をかけてくる。その向こうに、充分温まった由依の車が待っていた。さっと車のドアが開けられた。一瞬車内を点検する。確かめて運転席に座った。ドアがゆっくりと、確実に閉じられた。安全ベルトを締め、右手を挙げて挨拶をし、静かに車を発進させた。カーナビをテレビに変える。音声だけが今朝のニュースを告げてきた。なんということもなく、変わらぬ朝の繰り返しに見えた。

公園通りを走ってゆくと、後ろからパッシングが来た。携帯もなった。その先に車を止めて、とユー君が言った。ゆっくりと車を公園の入り口に停めた。ユー君が車から降りてきて、耳にイヤホンを差した機械で由依の車の周りを探った。そして、下周りから目を上げ、トランクリッドを開けてなかを覗いた。奥に何やら発信機が付けられていた。ユー君はそれを外し、耳からイヤホンを抜いた。

GPS機能の付いた、盗聴器ですね。念の入ったことだ。

だれ？こんなことするの。

誰かはわかりませんが、この車のトランクを鍵なしで開けようとするのは無理だ。とすると、仕掛けたのはホテルマンかもしれませんね。フロントは鍵を預かってくれてるはずですから。

えっ、そんなことまでするの？

しかねません、あいつらは。

じゃあ、私の事はもう筒抜けってこと？

でも、名前以外は全部うそでしょ？

そうよ。

だから、情報集めのために、こんなことをするんですよ。しかし、まいったなあ、なんか、すごくやばいことに手を突っ込んでしまったみたいですね。

ユー君は理系の知財に詳しいが、同時にボディガードとしても信頼がおけた。要するに理系オタクで格闘技好きの、一風変わった同僚だった。他に公安上がりのルパンさんもいる。彼は元の職業柄からゲシュタポ棒と拳銃の名手だった。といっても、警察をやめたら拳銃は持てないから役に立たないが、私たちの事務所では異色だ。しかし、なぜ彼らがこの事務所に居るのか、きょうやっとわかった気がした。そして、そのルパンさんがあの会社は危険だとその情報網から聞き出し、ユー君をこっちに回してくれたのだった。

遅いわよお、先に言っといてよ。何されるかわかんないじゃない。殺されるかと思ったわよ。

そんなにやばかったんですか。

・・・そうでもなかったけど。

そういいながら、あの中国人の舐めまわすような眼を思い出し、身震いする思いだった。

事務所に来てくれって言ってました。T芝と、・・・なんか、\*\*省のお偉いさんが来るらし

いんで。

えっ、なんで\*\*省がでてくるの。文部科学省ならわかるけど。

なんででしょうね。なんででしょうか。

ユー君も首をひねって見せたが、本当はわかっているみたいだった。

知らないのは私だけ？

いやいや。

そうって、ユー君は手を振って否定して見せた。

事務所の会議室には、もう防衛省の国内技術管理班を名乗る者が来ていた。その横に依頼人のT芝の係員とT芝海外経済研究所所員が同席していた。

こまりますねえ、T芝さん。ちゃあんと全部話しておいてくれなかったら、こっちはどんな目にあわされるかわかんないんだから。

さすがに所長も防衛省の人間とは初対面で、いきなり文句をぶつけるわけにはいかなかったのだろう。所長がそういって、防衛省の係官が、

そのことは私が説明致します。

と、どこか硬い口調で話し出した。たぶん、この人は制服組なんだろうと由依は思った。

今回貴社にご依頼いたしました核融合炉の特許の件は、これはこれで大変な事案で、必ず解決しなければならないのは言うまでもありません。ですからこの案件については、正面から貴社に解決をしていただくよう、お願いいたします。

正面から、というのは、公然と、という意味でしょうか。

そうです。きちんと法にのっとり商取引で解決してください。しかし、実はあの音響メーカーには、我が社と競合するもう一つの技術が今、それもととてもダーティな方法で開発されようとしていることも、解っています。

とT芝の研究委員が切り出した。

それがソナー探知機です。

由依は何を言っているのか解らなかったが、ユー君が実を身を乗り出して、

潜水艦の、ですか？

と早口で言った。

この、軍事オタク！男ってみんなそうなんだから。

と由依は思った。防衛省の係官は平然と頷いた。

そうです。それも、超低音域ソナーと高音域ソナーの組み合わせは通常よくあるのですが、そのデータの解析システムとデジタル表示装置の開発をやっているようなんです。それも他社の技術を盗用して陰でこそこそ開発し、それを民生品として第三国に

バラバラに分割して輸出し、そこから中国に持ち出すという巧妙さです。しかしそれも大した性能ではないので、見逃してはいるのですが。

えっ、それでいいんですか。そんなことしたら、日本の防衛が危ういんじゃないでしょうか。

いいんです、それはそれで手を打ってあります。

いいのかなあ。

ユ一君が首をひねる。

しかし、あの会社はもう乗っ取られてしましてね、GPSコンパスの精度を必死にあげ、潜水した潜水艦の位置を確認できるような位置コンパスも作ったみたいです。

あの、トンネルなんかでGPS電波の入らないところでも地図上の自分の車の位置を確認できるようにする、あれですか。

はい、まあほぼ同じ原理です。これを搭載すると、海面に受信アンテナを上げなくてもほぼ完全に地図上の自艦の位置を把握できますから、海底地形図に従って自艦を潜水航行させることができます。

あの国の潜水艦って、あのど素人の音響会社の技術でそんな大事なものを開発させなければならぬ程度のものでなんですか。

いやあ、なかなかのもんですよ、あの会社も。特にジャイロセンサーの技術はカーナビで鍛えてますから、精度も相当のもんです。それに、いかに原潜といえども、自動車ほどのスピードは出ませんし、車が道をくねくね曲がって走るのを追従してカーナビに表示できれば、鈍重な潜水艦の航跡を追いかけるぐらいはできます。

じゃ、大変だ。

そう、大変です。が、自艦の位置を捕まえられても、地図がなければなんの役にも立ちません。彼らにはその海図がない。海底図もない。ですから、彼らがどんなにハードを焦って手に入れようとしても無駄なんです。彼らにはそれが解ってない。もっとも、その海図を作るためにも、ジャイロセンサーがいると言えはいるのですが。

それに、海図自身も、いろんな市販の地図に書かれていますよね。

そうなんです。しかし、潜水艦の航行用海図は秘中の秘で、国家機密です。

いきなり小娘のように、わかんないといっってやろうかと由依は思った。だって戦争映画じゃ潜水艦は普通の船と同じように、取り舵何度とか深度〜と艦長が命令して進んで行ってたはずだと思ったからだ。しかし話は、そんなことすっ飛ばして進行していった。

で、あなた方は私どもに、何をせよとおっしゃるのですか。

所長が核心と思われる話をいきなり切り出した。



これからの政策として、政府は武器輸出3原則を大幅に見直そうとしております。もちろん無節操な武器輸出を国民が許すはずはないので、これまでのように政治的価値観を共有する国とかには、これからは兵器も技術もある程度の輸出を認めてゆこうという考えです。

そんな、輸出出来るような兵器とか技術って日本にあるんですか。

潜水艦がどうやって潜航出来るのか、考えてみたこともない由依が防衛省の係官に訊いた。

いままでは、戦争が最先端軍事技術を生み出し、それを民間に降ろしてゆくという流れでしたが、どんな技術が兵器に使え、軍事技術に転用できるかって境界は今もうありません。それは民間の技術が進んだということではなく、なにが軍事に必要かというニーズが大きく変化してきているからなんです。たとえば、日本の従業員130人ほどの中小企業が超音波センサーを作って、空港に売り込もうと見本市に出しました。そのセンサーは、上空150メートル程までの乱気流を感知できるんです。これは飛行機の発着の安全にはとても有効な機械と言えます。ところがこの企業のブースに、一番にやってきて熱心に話をしていたのは、空母の発着艦や戦闘機の離発着に使いたいという各国の軍関係の人間でした。それからHALというロボットスーツは、リハビリ関係が見向きもしない開発当初にあって、一番に飛びついて来て共同研究しようと申し出てきたのは米陸軍関係者でした。HALの方は肝をつぶして断ったようですが、米国はこれに発想のヒントを得て、HALのような筋力補強システムの開発に今とりくんでいるようです。また、これはよく知られていることですが、ステルス機にも電波吸収塗料を日本のメーカーが供給しておりますし、他にも挙げればきりないほど、日本の技術は軍事転用が可能なものがたくさんあります。

日本の防衛省が九州大学と共同開発を申し入れ、今開発中なのが臭いセンサーです。これは犬の10倍の能力だそうで、これを使って例えばテロリストによって仕掛けられた爆薬を探し出すのに使おうというものです。他にも地雷探査にも使えますし、麻薬犬の何倍もの精度と確実さで、密輸されてくる麻薬の捜査にも使えます。これを軍事技術への転用と言い切って、目に角たてて反対反対というのはいかがなものかとは思いますが、かつて戦闘機に到達距離を延ばすための燃料補助タンクを付けると、北朝鮮とか中国まで行けるようになり、専守防衛の憲法に反すると激しく攻め立てて、日本向けの戦闘機に補助タンクを付けられないような仕様に追い込んだ政党がありました。あの党には、中国から資金が流れ込んでいたという噂が絶えませんでした。どうだったんでしょう。ところがいまでは空中補給ができるようになりましたので、無意味な議論です。

かくのごとく、今日本のセンサー技術と通信技術、光学機械、他にも思いもよらぬものが軍事技術として欲しがられています。

と、そこまで話していいのかと。聞いているほうがハラハラするような話が展開されてきた。そこへ軍事オタクが熱っぽく口をはさんだ。

あの北朝鮮の無人偵察機もそうですよね。あれにはキャノンとニコンのデジタル一眼レフが乗ってましたし、プロペラエンジンも日本製の模型用ガソリンエンジンが使われてましたね。



しかし当局の発表は随分おかしいと思ったんですが。

いやあ、そのことに気が付きましたか。

防衛省の係官が笑って答えた。

気が付きますよ。あのデジカメはそれだけでインターネットに画像をアップできますから、機体を回収しなくてもデータは取れます。それにコントローラで操縦していただろうということは、機体の先端に短いロッドアンテナが立っていましたから、そうなんだろうとは思いますが、カメラのGPS情報はリアルタイムで確認できますから、機体のすぐ近くから操縦していたとはおもえません。それと、機体自身金属じゃなかったから、爆弾を工夫すればミサイルより安価で、確実に攻撃できる、・・まるで無人の神風特攻隊みたいだと、思えました。貧乏人の誘導爆弾攻撃機とでもいうのでしょうか。

由依がユ一君をたしなめた。今日の前にいる人たちを、そこまで信じて気を許していいのだろうかと思ったからだ。それと、信用するにたる人間だったとしたら、この人達は私たちをどこへ連れてゆこうとしているのか。そうおもうと急に怖くなった。

こちらのお嬢さんがなにかお疑いなのですが、

と係官が私をぴたっと見つめ、所長に話し始めた。

じつは、私たちのほうがあなた方を調べさせていただきました。

身元調査ですか。

そうです。で、一番高いところから、思想、諜報活動の専門まで動員して、外務省の対テロ情報室も協力を頼み、すべての点でシロという結論を得て、今回の案件をT芝から依頼する形を取らせていただきました。そのあたりはルパンさん、あなたならお分かりかと思いますが。

そうだよ、俺もここのメンバーの資料は一応目を通しちゃあいるから。

なによお、それ。なにをしってるっていうの。

由依が眼を剥いておこった。

それに、あなたはもう公安とは関係ないでしょ。

まあ、そうだな。

そうって、横を向いた。

えっ、本当に何かあるの？

そういうとユ一君まで分かりやすい反応を示した。

そうですか、知らなかったのは私と、由依さん、会計君だけですか。

私も関係ないですよ。

弁理士の理系君が片手をあげて言った。

ただ、心配なのは由依さん、あなたの分かれたご主人です。所在地がつかめません。私たちの調査範囲で解らないのは、むしろ不可解なんです。

私は、離婚してのち一度もあっておりませんので、そのあたりは・・・。

そうですね、実はあなたが一番問題で、携帯の通信記録、行動パターン一切、調べさせてもらいました。

そう聞いた途端、頭の血が一気に沸騰した。

なによ、どうだっていうの。

それには答えが返ってこず、

それだから、昨日の危機も回避できたんです。本当に危なかったんですから。

そういった防衛省係官の言葉が終わらないうちに、所長が、

解りました。お国のためなら、なんでもしましょう。

と、古めかしい言い方を構えて言い放った。

国は表立っては動けない。輸出入の管理は税関で一応できるが、ざるのように抜け落ちてゆく。日本の管理機構など大したものじゃないのは目に見えている。かといって、その野放し状態を放置するわけにはいかず、その技術内容を検討しながら大手軍需産業の下に組み込んでゆき、間接的に管理支配しようというのが眼目であり、その表の機関が私たちということだった。

まあ、それなりの実績と手堅い手法で、業界の信頼も得ておられるので選ばせていただきました。今回は弁護士さんが先走りましたが。由依さんとおっしゃったか、ちょっと控えめにお願いします。まあ、今回は我々が見ておりましたので事なきを得ましたが。

由依をちらっと見て、ユー君に目を移し、防衛省係官がそういった。じゃあ、何なんだと由依は反発しそうになったが、ユー君が眼で抑えた。

とにかく、今回の依頼は企業買収ということではなく、特許使用料を払うということに方針転換をして、話を進めてください。よろしいでしょうか。

とT芝が所長に言った。

解りました。そういうことなら、由依君、理系君、話を進めてください。

所長、私は昨日の今日で、追跡装置まで振り切ってますから、向こうも警戒して話どころじゃないんじゃないでしょうか。

いいんです。いけしゃしゃと顔を出せば、腹の探り合いで、無暗に荒っぽいことは出来ないもんです。ですから多分むこうは法外な金額を提示して、様子を探ろうとしてくると思いますよ。で、こっちは何かを匂わすようなことは一切しないで、ビジネスライクに、どかんと安い金額を言い張るんですね。そして金額面しか話をしないで、まとめようとすればいいんです。知らん顔して。いざとなったら、ユー君がいますし、理系君もついてますからお願いします。所長にはどこか窺い知れないものがあつた。それは日本刀のやいばの光り方に似ていた。

わかりました。

そういい、由依は女の特技を使うことにした。先ず前髪を上げ、髪を後ろで束ねる。次に口紅をもっと明るい色に変え、通常より大き目に塗る。眉も太く長く書く。濃い目のアイラインを

引き、付けまつげをして、細い縁の眼鏡を掛け、スーツを着る。それだけで見た目の年齢まで変わって見えた。

へえ、それって変装術ですか。

残っていたT芝の社員が首を傾げて言った。

そんなつもりはありませんが、時に顔認識センサーも誤魔化せることがあります。人は難しいですが。

そうでしょうね、なんとなくわかります。しかし、女は化けますねえ。

そうって同年齢らしい所長の方を見て、同意を求めた。

化けます。しかし、それも特技。

化粧を終えて戻ってきた由依を見て、所長が言った。そんな声を尻目に、ユ一君、理系君、行くわよ、と声をかけた。

由依は車の中で、先に渡されていた資料をもう一度読み直していた。由依は行を目で追いながら、ユ一君に訊いた。

私、わかんないんだけど、戦争映画じゃ、潜水艦って海の中でも普通にすすんでるじゃない？潜水艦が進んでゆくのに、何か前が見えるような窓みたいなものがあるって、そこから見ながらすすんでるんでしょ？

もう！だから素人ってばかにされるんです。潜水艦に前を見るような窓なんかありません。周りを見ることのできるのは、潜望鏡だけです。それに、いったん潜水してしまえば、たとえ窓があっても深い海底では光が届かず、真っ暗闇です。

じゃ、どうやってぶつからないようにすすむの？ むやみやたらに、めくらめっぽうで進んでいるとでもいうの？

第二次世界大戦の時は、いったん潜水してしまうと殆どめくらめっぽうで潜航していました。一応海図らしきものはありましたが、スピードと方向だけを頼りに、計算でここいら辺りを進んでいるんだろうと見当をつけてただけです。で、現在位置を知るために潜望鏡を上げ、島影を見て、天測も併用で自艦の位置を特定していたんです。今はそうじゃなくて、慣性航行装置と加速度センサーで自艦の位置を、綿密に調査されている海図上に特定してゆきますから、より確実に解るようになりました。

ユ一君、自衛隊だったの？もうとぼけなくてもいいんじゃない？

そうですね。確かに自衛隊でした。

防大卒の？

そうです。

で、潜水艦乗り？

違います。

じゃ、何？

言えません。言ってはならないことになってます。既存の任務ではないとだけは言えますが

。日頃の声音とは違った、きっぱりとしたものいいで見返しそうになった。

慣性航法装置といっても、要は独楽です。

こま？あの、回すコマ？

そうです。由依さんは関心ないから見たりしなかったと思うのですが、日本の観測衛星、だいち2号 のジャイロを作ったハイテク集団と東京青梅の町工場の熟練工さんたちが究極のこま作りで対戦するってテレビ番組がありました。

目的地まで時間、ユ一君は日頃のちゃらんぼらんさに似合わず、目を輝かせて話しました。

その番組の冒頭で、何時までも動かずじっと回り続けている独楽があれば、あらゆる技術分野で飛躍的な進歩が約束される、と言います。その通りなんです。こまは回っている限り芯の向きを常に一定方向に向けて立っていようとする力が働きます。その自立性があるからこそ、いか

なる空間でも軸になれるんです。 だいち には独楽が3次元のため3個入ってます。これが基本です。これで空間のXYZ軸が決まり、あとはXならXのこまを回してX軸を中心に だいち 自身を回し、姿勢制御をおこないます。この姿勢制御装置としてのジャイロは日本の作るものが世界一小さくて、完成度も高いと言われてます。しかし、そのジャイロも元は独楽ですから、テクノ集団が負けるわけにはいかないんです。一方のローテク熟練工集団は平均年齢が72才で、最高齢は78才、最年少でも64才という超アナログ集団で、携帯も持ってない、コンピュータも使ってない年寄りの集団です。ハイテク集団はこまを作ってもデータだ解析だと言いたがるし、それに頼らないと自分じゃ何も判断できないんですよ。回転数を計測し、知識の枠内でしか考えられない。数値とか数式の形になってないものは、未だそこまで認識できる能力のない人間には、ない ものなんです。熟練工軍団の人の持っているものは1/1000mmまで測れる計測器ひとつなのに、彼らは1/10000mmの誤差を修正できます。それを可能にしているのは、彼らの手の感覚なんです。目で見て、音を聞いて、旋盤のハンドルから伝わってくる手ごたえ、それらが彼らの言葉になってないデータで、彼らはそこから作り出すんです。だからハイテク集団は始めから勝ち目がなかったんです。

ユー君は一人熱く語った。

そうなの。結局熟練工さんたちが勝ったの。で、結局、なに？

日本が世界の列強と肩を並べて行けるのは、こうした日本人の職人技があるからだと思っています。ミサイルだ、爆弾だ、戦闘機に戦車を作るばかりが軍事技術じゃありません。そんなもん、日本の技術にとっては当たり前で直ぐ作れます。現にオーストラリアは日本の潜水艦の技術をほしがってます。

潜水艦って、原潜が一番なんでしょ？

由依はもう聞きたくもなかったが、軍事マニアに合わせて、なまかじりの知識で訊いてみた。

いつまでも浮上せずに潜ってられるという意味では、原潜は優れていますが、駆動力が違ふというだけで、後は通常の潜水艦とかわりません。ですが、原潜と肩を並べる通常艦を作る技術は日本が一番なんです。特にエンジンの静粛性と、プロペラの静音性はの本の技術あればこそです。



昨日、由依を追いかけまわした会社について。今日はユー君が受付を通してくれた。

T芝代理のコンサルティング会社の弁理士、佐藤と申します。と名乗り、特許担当の方に会いたい旨を告げた。手慣れたもんだと思う。受付嬢も昨日の様には怪しまず、関係部署に連絡し、通路奥に立って案内してビジネス用の応接室に通された。といっても、ソファーとかテーブルがあるのではなく、資料を置いて対面して話せる机が置いてあるという設えだった。さらに、客にお茶のいっぱいも出されなかった。ユー君が目を走らせている。部屋の壁、コーナー、かけられている絵画、由依には分らぬものがユー君には見えるらしい。ふっと体を由依のほうに向け、由依さんはこっちから見たほうがカメラ写りがいいと思いますよと言い出した。つまり、彼の背中の方に、監視カメラがあるのだ。由依は、手元の資料を前腕で囲い、ズームされても読めないように覆った。ユー君もビジネスバッグを机の上に置き、カメラの目から資料を遮った。ノックがされ、上に作業着を着た中年の男とスーツ姿の男が入ってきた。

知財部の\*\*です。弁理士の::です。

と各々が名乗り、名刺が交換される。言わば、開戦前に名乗りを上げるお決まりのシーンだ。こちらも名乗ろうとすると、知財部課長の手には受付嬢に渡していた名刺があった。

天下のT芝さんの代理とお聞きしましたので、ちょっと当惑しております。

と少々素直すぎる感想から応酬は始まった。

褒め殺しでしょうか。私共、上島コンサルティングがT芝の代理でこの度こちらにお伺いしたのは、貴社の特殊無磁性化鉄心の技術の特許を、ぜひとも使用させていただきたく、お伺いしました。

ああ、そのことではもうお電話でお聞きしておりましたので、それなりの調査はしておきました。しかし、T芝様にはもう当社とは違った形の同機能を持った鉄心材を開発されておられるのではありませんか。

新日本鉄鋼との共同開発で、今言われた鉄材の開発は終わっておりますが、さらに性能をアップさせるため、同様の技術をお持ちの会社様に特許使用の許諾を得ておこなうはとご相談に挙げたわけです。

内心は隠して、一部は本当のことを言い、その上にはったりを乗せる。由依が所長から教わったやり方だ。実際には新日本鉄鋼との共同開発は、形こそ整ったが成功とはいえない代物にしかならなかった。鉄とさまざまなレアアースをさまざまな量で混入してゆき、製品にしてみる、まさに実験と試みの繰り返しだったと聞いている。そのうち、勘のようなものが働くようになりはじめ、これは行けそうと思う段階までは行けたのだが、あと一歩がつきつめられなかったと口惜しそうではあった。

そうしますと、当社の特殊無磁性化鉄を使った製品を、T芝様に供給いたせばよろしいのでしょうか。それとも無磁性化鉄材を。

いや、材料ではなく、技術の内容をT芝に公開していただき、それについて使用料をお支払するという契約にさせていただきたいのです。

えっ、……。それはまるで特許の買取りと同じではありませんか。

お売りいただけるものなら、お売りいただきたい。

……。そういったご用件であれば、もう一度社内で見当させていただいてご返事申し上げたいのですが。

このやり取りで、今日は終わった。だが不意にユ一君が

こちらさまで、微弱超音波の高指向性音源と、受信マイクを開発されているとか、お聞きしましたが……。

と言い出した。この一言が相手の二人をあわてさせた。

いや、そのようなものは。

そうですか。なにか、こう、複数の音源から出た微弱な超音波が、重なったところでは明確なエコーが発生するとか聞きまして、ちょっと興味をもちましたものですから。

さっと顔色が変わった。

当社では、そのようなものは開発いたしておりません。

では、本日はこれで。

とあいさつされ、そうそうに追い出された。どういうことか解らなかったが、なにか虎の尾を踏んだような気がした。

何言ってんのよ、無事平穩にビジネスを済ませたらそれでいいのよ。なんか、とんでもないことをいったんじゃないの？

いやあ、つい。

そういいながら、計算通りと言いたげな顔をしていた。視線を感じ、振り返ると昨日の中国人取締役と目が合ってしまった。だが、何事もないような顔で立ち去る術ぐらいは知っていた。



ユー君によれば、現代の海軍は一見華やかで見栄えがするから空母がメインのような顔をしているが、実際空母のように隠しようのない存在の軍事行動はもはや現代戦のスピードについてゆけず、張子の虎ていどでしかない。では何が戦争をするのか。イージス艦と潜水艦である。第二次世界大戦で大艦巨砲主義をまず崩壊させたのがゼロ戦であったにもかかわらず、日露戦争の成功体験を忘れられないで大和に固執し、敗戦まで引きずった。そのあと、戦況を決めるのは戦闘機などの飛行機だと認識が改まって空母が海軍の中心になったが、トマホーク等のロケットミサイルが出現し、人間が直接戦う戦闘機は後退してゆく方向が決められた。飛行機の攻撃はいまや無人偵察機でも可能になった。

分かったわよ。

そういわなければ、ユー君の蘊蓄は止まりそうにない。全く、男っていつまで戦争ごっこがすきなんだか、と由依はあきれた。

一週間まって、改めて音響会社を訪れた。それまでの間、私たちは自分たちでも防衛省の挙げたりリストを点検してみた。ミサイル、爆弾、戦闘機、軍艦などを作ることだけが軍事産業ではない。H2Aロケットの連続13回打ち上げ成功とか、はやぶさを誘導する技術はもちろん、もっと地味な技術にも防衛省は注目していた。そんな中、あの音響会社とは別な音響会社で、自動車のフロントガラスにさまざまな情報を表示させる技術が開発されていた。そんなものと軍事技術がどう結びつくのか、なかなか想像が付かなかったのだが、その技術は車の走行安全性を高める目的で、前方の車や人をカメラでとらえ、衝突の危険性を判断して警告することを可能にするものだった。今これは、さらに進歩して、車それぞれを連携させ、例えばブロックの影にいる車が飛び出てきそうになると、直進方向に行く車に危険を知らせるというシステムである。これに米陸海軍が関心をしめしているという情報もあった。理系君によれば、戦闘行為中の全員に前方監視カメラと情報表示ディスプレイを装着させるだけで、敵の発見と襲われる危険性の回避につながると考えているようなのだ。この複数の監視カメラからの情報を高速に処理すれば、敵兵の人数、配置などが解り、それによってどう攻撃してくるか予測が付くようになる。いまはこれを後方の指揮官が判断し、指揮してきたが、ランダムな映像とGPS情報を処理し、的確に判断するなんて、とても間に合わない。そこでそれを瞬時にマッピングし、敵の位置と人数、火器の種類、さらにその敵がどう攻撃してくるかまで予測するシステムを開発しようとして考えているらしい。

今はもう兵の優秀さとかではなく、探知能力と処理速度の競争なんです。

ユー君がいう。ルパンさんも所長もまるで取り残された思いだ。ところが、理系君はあまり関心がなさそうだった。

公安の捜査は一に張り込み、二に歩き、といった具合で地道なもんだ。情報の糸づるを手繰ってじっと待つ。それ以外は何もできない。

そうですね。自由の国日本は、スパイも情報員もやり放題で、法的規制はありませんから

ユー君とルパンさんは意見が合う。由依とはそこが合わない。

しかし、この今の時代の日本で、昔の特高や憲兵並みの強引なやり方の捜査や拷問、自白強要をやって、尚且つすべてを闇に葬れる組織があるそうじゃないですか。

理系君が言う。公安だったルパンさんがうろたえた。

そんな組織が、今の日本で許されるはずがないじゃないか。

それが、あるんです。いや、あるそうなんです。

どこに？

ルパンさん、知ってるんでしょ？公安と内閣調査室の下部組織が一緒になって構成している・・・、なんて言ったかなあ、

いいよ、そんなこと知らなくても。

そのやりとりで、由依はそんな恐ろしい組織が日本にもあるんだと思った。

気になったので、由依はユー君に先日の事を聞いてみた。

その話ですか。また潜水艦の話蒸し返さなければなりません。潜水艦は一端潜航すると何も見えませんから、周りの状況を知るために、ソナーを使います。それにはアクティブソナーとパッシブソナーがあって、じっと耳をすませて周りの音を聞く場合と、積極的に高周波音を短く発して、反射音で周りの状況を探査する場合の二通りをいいます。しかし、この水中で通り良い超音波を発射すると、敵にも自分の位置を知らせることになります。そこで、非常に微弱な超音波を複数の音源から音響レンズを通して発し、光の焦点をあわすようにして音を集中して重ねあわせ、その焦点の合った点の探査をするという技術です。これは発した単独の超音波自身は非常に微弱で、敵に感知されにくいという利点があります。また集結した超音波の反射音は、まるで重ね合わさった場所が音源のような錯覚を起こさせます。それが非常に先進的なアクティブソナーの開発につながると言えます。

いわば、レンズで太陽光を集めるとじりじりと紙を焼くって、あれのこと？

そうです。

なんか、すごい技術ってこと？

すごいです。音の焦点の合った場所が超音波の音源のように見えますから、そこにピンを打った艦がいるという錯覚を起こさせます。まるでゴーストです。

そんな技術が今の日本にあるの？

あります。

ユー君は断言した。

あります。それだけじゃなくて、今すぐには声高には言われていませんが、F15戦闘機にSEというステルス戦闘機があります。このF15SEをとらえることのできるレーダーも日本は開発してしまいました。。現在現役のステルス機は見えます。

よくわからない、と由依は思った。

ステルス戦闘機って見えない戦闘機ってことですよ。それが見えるの？

見えるんです。もっともF15SEは古い機体ですから、次の第五世代のステルス機についてのレーダーは未だ開発途上ですが、このことだけで十分中国やロシアを充分驚かせましたし、米国を大慌てさせました。ですから逆に、心神のステルス性の優秀さと操縦性の高さは・・・

それって何？

日本国産の第6世代ステルス戦闘機です。

もういい。頭痛い。文系の頭にはもう一杯いっばいだわ。

そういいながら、あの音響会社のビルを見た。危険かもしれないと思った。ルパンさんが来てるはずと思った。

ところが交渉は思った以上にスムーズに進んだ。特許使用料は、この特許を使っている他社と同様の金額が提示され、殆ど計算してきた内容通りで、気が抜ける思いだった。

分かりました。それではクライアントにこの条件を伝え、合意を得てのち、契約させていただきます。

由依は相手方の提示してきた契約書をつぶさに点検して、そう返事した。

よろしく。

相手方の代表が頭を下げた。すると、上着の胸元が開き、ピンマイクがのぞいた。頭上でも監視カメラが睨んでおり、その先の監視モニターを見つめる目まで想像できた。危険かもしれないと改めて思った。三階の会議室から外に出ると、人影はなかった。二人でエレベーターに向かう。すると階段の所で腕を掴まれた。一瞬声が出そうになったが、ルパンさんとすぐ分かったので由依は声を飲み込んだ。

こっちだ。

という。ユ一君と由依はルパンさんの先導で階段を駆け下りた。そして二階では廊下の反対の方向に走り、非常口を開けて、外の階段を降りた。下に車がエンジンをかけて待っていた。ドアを開け、三人が乗り込んだ。ハイブリッドの車は殆ど無音で走り始め、隠密に裏口から滑り出た。

ルパンさん、そんなに危なかったんですか？

ユ一君が訊いた。

そうだな、公安が常時監視するぐらい、あぶなかった。この前の事もあるしな。

そうって由依を見た。



今回の案件は、この後所長とルパンさんが引き受けてくれることになった。由依が弁護士として契約書を見るまでもなく、定型的な処理で済むからだ。もうユー君は行かないほうがいいし、由依を危ない目に合わせるわけにはいかないという判断でもあった。しかし、由依は現実には危険な目にあっただけでもないのだから、なにがどう危険なのか解らなかった。

危険な目に合わなかったからといって、危険が存在しなかったとは思わないでください。そういったユー君の耳元には、警察官がいつも耳に差しているトランシーバのイヤホンが、目立たぬようにではあるがささっていた。

この仕事から、由依たちの事務所は、より目立たなくするために場所も移転し、田舎に移った。その分、気持ちの方も少しゆるみが出てきた。

由依さんはあの、風たちぬってアニメ映画、見たって言ってましたよね。と理系君が固い口調で話し出した。彼はいつも緊張しているのだ。

ええ、去年見たわ。・・・、こんなことなら、もっとよく見とくんだった。

あれは、ゼロ戦の話でしたが、あのゼロ戦、プロペラはアメリカの特許技術を使ってたんです。

由依が頷くと、更に、

アメリカの特許技術を使ってたんですから、当然特許使用料を払わなければなりません。それで、日本は戦争中もずっとその特許料を払い続けていたそうです。

ああ、なんてエピソードなんだと由依は思った。日本人の律義さはこんな風にも発揮されるのかと。

こちらに事務所を移したのは、前の事務所が常に監視されていることが分かったからだ。それは当方が新たに設けた監視カメラに頻回によく似た人物が映るようになったこと、それからルパンさんにしか解らない手口で事務所に誰かが侵入し、盗聴マイクが仕掛けられていた事などではっきりした。

ルパンさんは言う。

中国系は、あいつらだけの理由でいきなり理不尽な凶暴さを発揮するんだ。これは、日本人には想像もつかないところがある。それも、凶器は蛮刀なんか振り回すから。

それらを勘案しての事務所移転だった。

新しい事務所に移転したからと言って、仕事は待ってくれない。私たちに次の指示があった。M&Aを仕掛けろとの指示だった。相手は思いもよらない、小さな同族会社だ。その会社はマグネシウム加工に特異な技術を持っていた。そしてその会社を吸収したがつているのは、経営のカリスマが率いていた、戦後の日本を代表する巨大家電メーカーだった。

なんで？

理系君に訊くと、

電池です。

とそっけなく返してきた。

今リチウム電池が主流ですが、その次はマグネシウム電池か水素電池のどちらかが主流になると思われています。たぶん日本は水素燃料電池の方が優勢になると思われますが、それには、電極にニッケルと希土類元素、マグネシウムが使われています。マグネシウム電池はもちろん電極に二酸化マグネシウムとマグネシウムが使われます。電池と言うからには、外から電気を与えて、電気をためておくのが本来ですが、水素燃料電池は全く違って、電池と言うよりは発電装置と言ったほうがいいです。ですから、これが完成すると、エネルギー革命が起こります。自動車は給油口から水素を注入してもらい、マフラーから水をこぼして走ります。各一般家庭は今のガスパイプのような配送設備で水素を受け取り、一家に一台の燃料電池で必要なだけ発電して、今の電化住宅での生活のように暮れしてゆけるようになります。もう二酸化排出量がとか、地球温暖化とか大気汚染とも縁が切れます。原子力なんかもってのほかになります。そんな技術革命の動きに逆らっているのが、小さくは電力会社であり、重電機製造と原子炉に長けてる月立、T芝であり、石油会社と言うことになります。しかしそれだけに終わらず、世界はひっくり返ります。原産国、天然ガスのロシア、シェールガスの米国などの資源輸出国は皆悲鳴を挙げます。

何が起きているのだろうか。二次か三次か知らないが、とんでもない技術革新が起こり、世界は飛躍するのだろうか。由依は理系君の説明など解らなかったが、とんでもない未来図を見た思いだった。

で、なぜそれが今度の軍事技術関係のM&Aにつながるの？

わかりません。竹下は傘下の四洋を元の組織に戻して吸収しましたが、その三洋電機は燃料電池の電極技術をほぼ実用段階にまで持って行ってるはずですよ。ですから、豊田自動車と竹下は来年燃料電池車を一般に売り出しますし、政府もその後押しで、水素ステーションの建設を認めています。2020年には都内のタクシーを燃料電池車のみにするという方針を打ち出しました。くわえて、700万と、あまりにも高すぎる燃料電池車に価格の半分近くの300万の補助金を出すと言ってます。これは、iPS細胞の比ではありません。これからほんの数年後には、燃

料電池車は今のハイブリッド車並みになるそうですから、社会構造自身が変わってしまいます。

しかしどっちにしても、マグネシウムの加工はとても困難なところがあって、柔らかいので切削加工は容易なのですが、すぐ目詰まりしてしまいます。同時に切り子がとても不安定で、ちょっとしたことで激しく燃えます。時には爆発的燃焼さえ引き起こし、大事故にさえなりかねません。そのあたりに何か特殊な技術があるようで、それが今回のM&Aの理由じゃないかと思っています。

わからんわ、何が軍事技術なのか、何が兼用可能な民間技術なのか、何を防衛すればいいのか、チンプンカンプンよ。

そうですね。自動掃除機のルンバが地雷探査ロボットになり、ゲーム機のコントローラーが無人偵察機を操りますから。

しかし現実に、もう戦争は起こってます。

えっ？中東のイスラム過激派なんかのこと？

それもありますが、中国と西側のアメリカとか日本の軍事産業に仕掛けられるサイバー空間でのハッキングは、まさに国益を根こそぎ奪って行く戦争です。しかし本当の軍事技術は、その国に蓄えられている基礎的な工業技術です。人の手で作り出されるものがガタガタでは、ろくなものが出来ません。設計図は盗めても、人の身に着けた技術は持ってゆけません。

マグネシウム加工に特殊技術を持った会社は、平穩にM&Aに応じた。自分たちがあまりに特殊すぎることを知っていたからだ。それが次世代の技術として大きく飛躍するとはわかっていても、会社自身がそれを待てなかったというのが本当だった。それゆえ、生き残りをかけて大樹に身を寄せることを選んだ。彼らも竹下の傘下に収まれば、自分たちに未来があると理解したのだ。

だが危険といつまでも無縁でいられるわけではなかった。この国の国営放送局が開発した技術が、遠くて近い国の標的となっていた。

その技術がなぜそれほど大変なものか、由依には理解不能だった。3D眼鏡を使わなくとも立体映像が見られるということのどこが重要なのか。だが現実には、中国はこれを開発した人物を取り込もうと躍起になっていたという事実があった。

3D映像技術と言っても、画面がより迫力をもってみえるってだけでしょ？

そうです。テレビという媒体に画像を映すだけなら、それを楽しめば終わりです。ですからNHKははこの技術をもとに、2020年東京五輪で3D眼鏡なしで見られる次世代の立体テレビ試験放送を目指しています。あれやこれやといった技術面での説明ははぶきますが、この技術、超臨場感立体映像システムと言いますが、これを使えば標的を瞬時に探り当て、距離を寸分狂わず測定できるため、例えば無人偵察機や中距離ミサイル、空母キラーといわれる対艦誘導ミサイルの目にできるんです。ましてこの技術はレーダー波を使いませんから、電波錯乱によるミサイル防衛網など、やすやすと突破できます。

この技術への中国の謀略戦は生易しいものではなかった。防衛省が把握したところでは、上海の国際学会に出席していたK氏に対して中国科学院上海光学精密機械研究所（SIOM）室主任が直接接触してきて、厚待遇で迎える用意があることを伝え、必死に誘ったが断わったそうだ。

この科学院というのは、中国人民解放軍と直結しており、SIOM、SIMITとも軍事技術開発の中核で、両研究機関は衛星やレーザーを使った地上攻撃、対立国の衛星破壊技術開発に全力を挙げており、サイバー戦の頭脳でもある。衛星を使った中国の軍事技術開発のキーマンであり、3D画像技術開発の先駆者であるK氏の取り込み説得工作を依頼したのだった。この科学院が衛星を使った中国の軍事技術開発のキーマンであり、3D画像技術開発の先駆者であるK氏の取り込み説得工作を依頼したのだった。そして

「われわれには3D画像技術に20億元（約340億円）の研究資金がある。我々中国の対日優位は揺るがない」と懸命に説得しようとした。そしてさらにK氏の両親が南京市出身であることを念頭に、

「あなたの親は南京事件を忘れちゃいないだろう。」



「日本なんか見限って我々に協力しろ」  
とまで迫った。しかしK氏は  
「私は米国人だ。そのつもりはない。」  
と席を立った。

そのあと、FPGA集積回路チップの盗難が起こった。これにはK氏の開発した立体映像技術のプログラムが書き込まれるはずのもので、実際はまだ書き込まれておらず、技術の流出はここで食い止められた。いわば不幸中の幸いであった。しかし中国の説得の言葉には  
「日本には2000人の中国からのスパイがいる。」  
という脅し文句があった。FPGAチップの盗難事件もこの言葉の証拠だろうと思われた。

多視点型の3D立体映像技術は、他にホークアイシステムと呼ばれている技術がある。これはいまゴルフの打球やサッカーのボールの軌跡を再現するのに応用されて、審判の判断に使われている。これを開発したのはアメリカのホークアイイノベーションズで、2011年ソニーがこれを買収した。今このような技術を深化させてゆくのに、日本の技術が使われている。アイデアはアメリカ、それを磨き上げるのは日本という構図がここでも生きている。それゆえにこそ、こんな技術を持った会社の買収をアメリカは容認した。所長がそんな話を何気なく話した。日本は官民一体となって、直接的な武器ではなく、ハイテク装備の技術を開発している。もう武器輸出3原則は、今の内閣で骨抜きにされた。

もう家電の時代じゃなくなってるからね、日本は。ホンダだって小型ジェット機を作って生き残ろうとしているしね。

じゃどこかで日本は結局死の商人に成り果てるのですか。

おやまあ、またえらく古めかしい言い回しが出てきたもんだ。言葉でどんな理屈付けをしても、日本は欧米が武器を作って売りまくっている中へ割り込んで、独自の足場を作ろうとしているのは間違いないと思うよ。冷蔵庫からロボットへ、デジカメからミサイル探知機へ、旅客機からステルス戦闘機へと向かってゆき、無人探査機を開けてみると中は殆どメイド・イン・ジャパンと言う時代が来ると思うよ。いやもう来てるかもしれないな。あの遠い国、北朝鮮の寄せ集め無人偵察機がそうであったようにね。エンジンは日本のラジコン飛行機のエンジン、カメラはキャノンやニコンの一眼レフ、コントローラもラジコンの流用、機体だけが北の手作りってことが、アメリカでも行われているのさ。だからって、直接の武器弾薬やミサイルではなく、民生品であり、技術は同盟国への防衛のための技術協力と言うことになる。オーストラリアへの潜水艦技術協力がそれだ。

そんな所長の講義を聞いていると、ユ一君が飛び込んできた。

あのマグネシウム加工会社、燃えました。今テレビのニュースでやっています。  
声が引きつっていた。

マグネシウムの引火性には充分熟知している会社が燃えた？

そうです。それについては警察とは別に、公安調査庁が動いているようです。

破防法関係か？

それもありますが、韓国系のキリスト教団体の手引きで、北か中国の工作員が、あの会社に潜り込んで技術を盗もうとしていたらしく、それが暴露されそうになって逃げるために火を点けたということのようです。

違うよ。

後から入ってきたルパンさんがいった。

工作員が技術を盗もうとしていたのは本当だが、それは中国系で、中国科学院の下にあった部門と東部人民解放軍の部門の内部対立があんなことを引き起こしたらしい。

なかで対立してるんですか。

殺しあいしてるよ。警察の公安はずうっと監視していたからそのあたりの事情は分かってたんだ。

北、じゃないんですか。

北はそんな技術、盗んだってどうすることもできない。せいぜいがデジカメを買って第三国経由で送るぐらいだ。

そうですね。それに中国って内部の権力闘争が激しいようですから。

公安は韓国と中国の裏での結びつきを監視し続けてる。韓国の財閥系で、中国の権力と手を結んでないところなんかない。それを表立って行動できないから、韓国内部の新興キリスト教系オカルト宗教団体にやらせている。日本人信者を利用して日本への潜入させるだけでなく、米国やほかの国への潜入も手引きしてる。最近ではJRにも入り込んでるらしい。

それって何ですか。

リニアモーターカーだよ。

高速鉄道の技術を盗みにですか。高鉄外交で中国はアジアを支配しようともくろんでますから。

それもあるが、電磁式カタパルトと電磁加速砲への応用を目指して、世界で一番完成度の高いJRの技術を狙ってる。あの中国のポンコツ空母を何とか使えるようにするには、電磁式カタパルトしかないから。電磁式カタパルトは、米国は2016年就航の空母に搭載したいと考えているので、あの人はオバマに日本のリニア技術の無償提供を申し出た。もちろん米国からの、たっの要請に応えたんだが。それと引き換えに、日本はアメリカのリニア新幹線を手に入れるわけだ。

レールガンってなんですか？

超電磁砲は、火薬を使わない、リニアで電磁体の砲弾を発射する兵器だ。今は火薬での発射初速度と同じ程度に到達した程度だが、将来は音速を超える速さで、それも連続して発射できるようになるという予測がある。リニアは兵器になる。



## 暗殺の夜

---

いまはもうわけのわからん時代さ。

不意に現れた元夫が、由依にいった。

なんか、危ない仕事をしてるんだって？

誰に聞いたの。

由依の所の所長。というか、由依を推薦したのは私なんだが。

訳が分からなかった。司法修習生から就職した弁護士事務所が、所長の引退で解散になり、次の事務所を捜していると、声をかけてくれたのが今の所長だった。もう法廷に立てないのはさみしかったが、実務の方で頑張るのもこの職の在り方と割り切った。それが前の夫の目論見に乗ってたとは思いつかなかった。

もともと今のチームは防衛省の肝いりで結成されたんで、所長はその責任者だったんだ。その所長がルパンさんや理系君、ユー君を防衛省の調査したリストに基づいてヘッドハンティングして回ったんだ。その中に由依も入ってた。

由依の頭の中には？マークが点滅していた。朝会社に出て行き、夕方定刻に帰る、時折外国へ出張することもある平凡なサラリーマンと思っていたのだ。それがあるとき、長期出張で帰らない日が続いた。少なくとも由依はそう思っていた。由依も自分の仕事が結構忙しかった。それで、時折携帯に連絡が入ることで安心していただけだったが、ある時からプツリと連絡が来なくなった。そんなときだった、自宅マンションに泥棒が入った。部屋は一面荒らされ、あらゆるものがひっくり返されていた。しかし、現金も通帳も無くなってはいなかった。そして、その部屋で呆然としていた時、携帯が鳴り、由依、逃げろと夫から架かってきた。訳が分からず、由依はあのホテルに逃げた。

あなたって誰？

離婚届を送るからサインしろ、命に係わるから僕と別れたことにしろと電話で言われ、一方的に別れることを強要された。

本当は、僕は妻帯なんかしっちゃいけなかったんだ。

という。

だから由依に危ない目に合わせた。

今君はターゲットになっている。あの音響会社とマグネシウムの会社にかかわって、中国の奴らに目標にされた。今回は中国の内部闘争で先延ばしになったが、次は危ない。ユー君でも守れない。3D映像技術の事を覚えてるか？

と聞く。

覚えてるわ。

と答えた。

あの盗難事件をK氏に通報してきたのは米国の捜査陣だった。彼らはスノーデンの告発の後も、世界中の通信を傍受し続けている。沖縄と横須賀の象の柵は、今も聞き耳を立てている。それだけではなく、中国以上の人数が活動している。

じゃあ、あなたはなんなの？

防衛省情報本部電波部、陸上自衛隊情報探査部。

じゃあ私は？

女スパイ

笑った。二人して大笑いした。テーブルの目覚まし時計が急に鳴り出し、かすかにプラスチックの燃える臭いとともに止まった。夫の目の色が変わった。

バスルームに逃げろ！電波だ。

何を言ってるのか解らなかった。

とにかく窓から離れて、コンクリートに囲まれているところに逃げろ。

彼は由依の手を引っ張って逃げた。

頭が痛くないか？

と訊く。

大丈夫よ。

というが、少し手足が痙攣する。

何これ？

強力なミリ波を照射されたんだ。頭部に集中すると、てんかんのような容態になる。小脳に焦点が合ってしまうと、呼吸中枢が焼かれて、一瞬で自発呼吸が止まり、窒息死する。人レーダーという人間を追跡できるレーダーの出力レベルを大幅にアップした暗殺兵器だ。イージス艦のレーダーの前に立つと電子レンジに入ったようになって、焼かれてしまうのと同じだ。防衛省電波部も研究している。

じゃあ、実際に使ったりするの？

それは知らないほうがいい。多分もういいだろう。ここを脱出しよう。まだ、カーボンナノチューブとか自動運転装置、遠隔充電技術なんかの日本独自の防衛技術はたくさんある。外務省情報部も加わっての諜報防衛は今急務なんだ。

由依は逃げた。元夫とともに逃げだした。日本の中なのに、どうして逃げなきゃいけないのか解らないまま、逃げた。

## 夜明けへと急ぐ夜

<http://p.booklog.jp/book/119148>

著者 : pinokopapa

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/pinokopapa/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/119148>

電子書籍プラットフォーム : パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社トゥ・ディファクト